

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

フランスの博物館・美術館にみる展示の新しい傾向

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード: 作成者: 園田, 直子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00002180

第1章

フランスの博物館・美術館にみる展示の新しい傾向

園田 直子

1. はじめに

フランスにおける博物館・美術館のここ200年の歴史のなかには、博物館・美術館という存在そのものが埃じみた場所として忘れ去られる運命にさらされた時期もあった。しかし、今日の博物館・美術館の展開には、そのような陰は微塵にもない。容器(contenant)として、中身(contenu)として、双方の面から博物館・美術館の役割が再認識されたからだ。容器としては、伝統を尊重しつつ新しさを共存させる場としての建造物の役割がクローズアップされている。博物館・美術館の改装や新築が、現代の建築家にとって大きな自己主張の場になっているのは、フランスに限ったことではない。一方、中身としては、自らのアイデンティティーの媒体としての博物館・美術館の役割が重要視されている。

フランスの文化省は今年（1999年）40周年をむかえた。その歴史の中でもとくに後半の20年間は文化活動一般において、そして博物館・美術館の世界において、次々と大きなプロジェクトが実現されていった時期にあたる。1981年、フランス大統領となったミッテランは、「大規模土木事業」(grands travaux)と総称した一連のプロジェクトのもと、音楽、文学、造形、科学技術など多岐にわたる分野を対象に、施設を次々に改装あるいは建設するという大がかりな文化政策を展開していった。その根本には、「大規模土木工事」を実現させることによって、すべてのフランス国民に、国のもつ文化資産を開放するという思想がある。なかでも、ルーブル美術館に関するグラン・ルーブル計画は脈々と20年近く続いている。最終的には2000年に完了する予定である。

1981年 ミッテラン大統領のグラン・ルーブル計画（ルーブル改装計画）開始

1989年 イエオ・ミング・ペイ設計のガラスのピラミッド完成（写真1）：美術館の中央入口のシンボルとしてガラスのピラミッドがつけられた。

この下から動線が大きく3方向に分かれる。

1993年 彫刻部門および絵画展示室(2階)の改装完了：リポリー通りに面したり



写真1 ルーブル美術館の新しい入口となった
ガラスのピラミッド

シュリユー翼にあった大蔵省の
移転にともない、その後のスペ
ースを展示室に改装した。

1997年 エジプト考古部門、ギリシア・
エトルリア・ローマ考古部門、
および16-17世紀イタリア絵画
部門の改装完了。

1999年 イタリア絵画、スペイン絵画、
北方絵画の展示室の改装完了。
美術工芸品の新展示室完成。

これらの年代と、フランスの国立博物館・美術館入館者数を見比べると、興味深い現象に気づく。ひとことで博物館・美術館といっても、実はルーブル美術館、ベルサイユ宮殿、オルセー美術館のビッグスリーがフランスにおける博物館・美術館の入館者数の八割近くを占め、なかでも入館者数トップを誇っているのがルーブル美術館である(園田1997)。言い換えればルーブル美術館の入館者数が、即、全体の統計に影響を与えるのだ。参考までに1997年の例をあげる¹⁾と、国立博物館・美術館の総入館者数は約1300万人、そのうちの約464万人がルーブル美術館の入館者である。国立博物館・美術館の入館者数は1985年に比べ、その後の10年間で33パーセント増加した。しかし詳しくみていくと、今日の博物館・美術館の改装や建築ラッシュとは裏腹に、人々(フランス人あるいは海外からの観光客)の微妙な文化離れともいえる傾向がみえてくる。入館者数は1985年から徐々に増加し、1990年にピークをむかえた後、減少している。なぜ1990年にピークがみられたかというのと、その前年にルーブル美術館のガラスのピラミッドが完成したのが直接の原因であろう。2回目のピークが1994年にあるが、その前年にはやはりルーブル美術館の彫刻部門や絵画部門(2階)がリニューアルオープンしている。入館者数はその後再び減少し、1990年のピーク時と較べると1995年までに20パーセント近く減り、そのまま1997年までほぼ横這いの状態が続いている。

ここでは1996年から1999年にかけて数回に分けて訪れたフランスの博物館・美術館で感じた展示の新しい傾向を、1989、93、97年の改装後のルーブル美術館を中心に、1994年にリニューアルオープンした自然史博物館の「進化の大ギャラリー」、

1997年開館の音楽博物館の状況をまじえて述べていく。

2. 歴史的建造物を利用した展示空間

博物館・美術館の建物を考えたとき、音楽博物館の場合はクリスチアン・ド・ボルツァンバルクの設計で新しく建物をつくったが、これはむしろ例外といえる。フランスの博物館・美術館は歴史的建造物の中にあるものが多く、外観は昔の名残をとどめながら内部の改装がおこなわれる。

歴史的建造物内に博物館・美術館がある場合、当然のことながら建物自体からくる制約をまず解決しなければならない。1793年に開館したルーブル美術館は200年以上の歴史を持つが、建物としての歴史はその4倍以上にもなる。1190年フィリップ2世が建てた中世の城塞を核とし、フランソワ1世からナポレオン3世まで代々の権力者によって改装・増築が進められた建物自体が文化財である。その上、もともと美術館としてできたのではない建物（宮殿）である。どのようにしたら観覧者にとって使いやすい、見やすい美術館にできるのだろうか。エスカレータひとつを導入しようとしても、宮殿内の古い部分を一部くずすことになるので、事はそう簡単には進まない。また、いたるところに段差がある。車椅子の方々の便を考えて移動用のリフトを設けなければならない（写真2）。このような制約をひとつずつ解決しながら、既存の建物を実にうまく利用して改装は進められていく



写真2 車椅子のための移動用リフトは、建物内のすべての段差に設けられている。

(Centre national de documentation pédagogique1993)。

ルーブル美術館に1989年にできたガラスのピラミッドが、その素材の斬新さゆえに注目を浴びたのは記憶に新しい。代々改築・増築が進められていたといっても、いずれも石という素材では統一されていた建物に、突如、ガラス張りの建

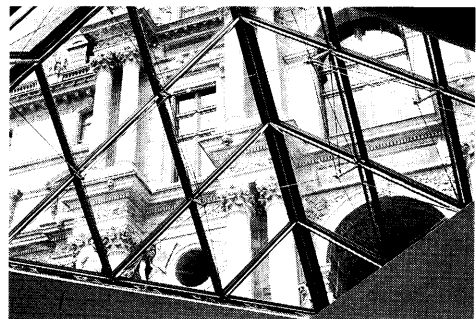


写真3 ガラスのピラミッドの内側から見たリシュリュー翼の石造りの建物。

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

写真4 彫刻展示室になった「マルリーの中庭」

造物が加わったのである。しかし、いつの間にか、この新旧の素材の対比（写真3）が建物としてのルーブル美術館の大きな魅力になっている。なお、このピラミッドの真下の空間はレンタルスペースとして活用されており、館の閉館時間を利用して、各種企業や団体がレセプションをひらいている。

また、1993年にオープンしたフランス彫刻の展示室のある場所は、かつては中庭であった。今でも5-18世紀の彫刻展示室を「マルリーの中庭」（写真4）、18-19世紀のほうを「ピュジェの中庭」という名でよんでいる。中庭全体をガラスの天井で覆い、温室風の

展示室に変身させている。中庭の空間全体を使用しており、天井が非常に高い。屋内でありながら、どこか公園を歩いている気持ちになる。木立も植えられ、より明るい雰囲気を出している。かつて屋外におかれていた巨大彫刻をおくのにふさわしい展示空間になった。つけ加えると、このマルリーの中庭には大きな宣伝効果がある。というのも最寄りのメトロの駅を出て、地上経由でガラスのピラミッドまで行くには、リシュリュー通路とよばれる宮殿の一部を横切るアーケードを通ることになる。



写真5 「マルリーの中庭」を覗く行人

ことになる。この通路の横手の一部がガラス張りになっており、そこからマルリーの中庭が覗けるのだ（写真5）。美術館の一部が、一般の通行人からながめることができる仕掛けだ。

自然史博物館の開館は1889年に遡る。ジュール・アンドレ設計の建物は、当初から自然史関係の標本の保管・展示を目的に建てられていた。しかし第二次世界

大戦を経てとくに老朽化が進んだこともあり、1965年にいったん閉館している。1985年には建物の外観をそのまま残しながら、地下に3階建の標本室が完成した。空いた地上部分の有効利用として構想されたのが「進化の大ギャラリー」であり、4億フランを投じて9年後の1994年に実現している(Muséum national d'histoire

naturelle 1994)。中央ホールは天井まで吹き抜けにしてあり、周囲には回廊形式に展示室が各階に設けられている。中央ホールの広い空間のなか、象、キリン、カモシカ、その他アフリカのサバンナに生息する動物が堂々と進む大行列（写真6）は圧巻だ。剥製はそれぞれ頑丈に固定されているが、首を傾けたり、鼻をもちあげたり、などといかにも自然な姿態であらわされている（写真7）。

ルーブル美術館の彫刻室にしても、自然史博物館の大ギャラリーにしても、建物の高さいっぱいを利用した展示室の高さだけが重要なのではない。展示空間を変化させているところが肝要だ。いずれの場合も、広い開放的な空間に到達する

までは、ごく普通の高さの展示室を歩いていく。ところがある時点で、急に、目の前に吹き抜けがあらわれる。動線にしたがって歩くと、展示空間が大きくなったり小さくなったりとメリハリがある。観覧者の心理をたくみにとらえており、意表をつかれる。

現在、ルーブル美術館の東洋部門ともいえる国立ギメ美術館の改装が最終段階にはいつている。外壁以外はすべて新しくなる。リニューアルオープンは2000年秋ということだが、今度はどのような工夫がこらされるのだろうか。

3. 作品に「語らす」展示

ルーブル美術館では改装にあたり、なるべく「すべてを見せる」という方針をとった。18世紀、啓蒙主義の百科全書家の流れをくむ伝統ということもあるが、それと同時に現代博物館学の考え方ともとれる。どの時代にも傑作があれば、周辺作品もある。傑作といわれているものだけを陳列するのではなく、時代の流れ、特徴がよりよく理解できるように周辺作品もなるべく多く見せたいという考えだ。フラン

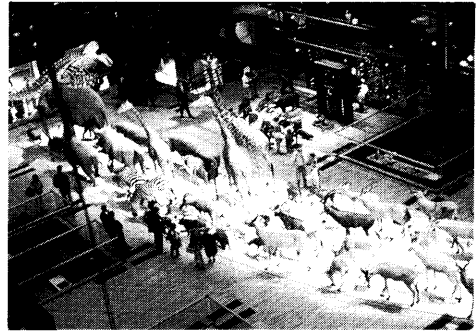


写真6 自然史博物館「進化の大ギャラリー」における動物の大行列



写真7 行列を作る動物たち

スのほかの博物館・美術館でも、よく見ればかなりの数のものが展示されている。数の多さを感じさせない作品の見せ方、効果的な解説の仕方の例をあげてみる。

作品の見せ方

ひと昔前までの美術館では、壁一面に隙間なしに額と額をくっつけて並べていた。展示室が少ない場合はともかく、これでは見にくく、疲れてしまう。ルーブル美術館の新しい展示室では、主要作品は離して一列に並べることで他から際立たせる一方、それほど主要でないものは二列に並べている。ちなみにこの場合は、人間の目の高さになる下段の方により重要な作品をおいている。いってみれば、作品の並べ方で美術史の要所を所をおさえているのだ。また、大きな作品も小さな作品も見やすいように、部屋の空間も作品にあわせて大小をつけている。壁の色も、作品にあわせてベージュ、淡いグリーンなどと気をつけている。

最近の展示では、ガラスなど透明の素材、そして金属が多用されている印象をうける。自然史博物館では複製品やジオラマを排除した、すっきりした展示がとくに印象的だ。木々の高いところに棲む動物や鳥を展示するとき、まっすぐな柱を使っている。無機的に純粹に高さだけをあらわしているのだ。あるいはガラス板に模様を彫ることで、そのケースのなかの動物がどのような生態圏に生息しているのかを簡潔に示唆している。動物そのものを際立たせるために、動物以外の説明的なものなるべく排除しているし、支持具もなるべく目立たせないようにしているのだ。ガラス、金属、このように素材だけをとれば冷たい印象になりがちだが、これら無

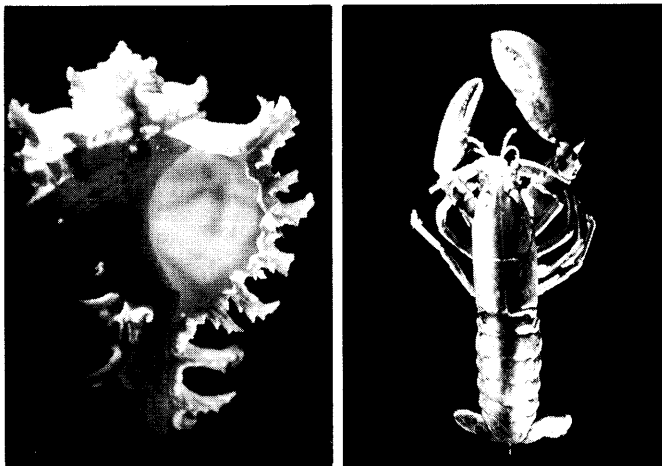


写真8 自然史博物館における照明効果 (B.LAVEDRINE氏撮影)

機質にうまく有機質の材質を組み合わせることで、雰囲気をやわらげている。板張りの床、というふうに効果的に自然素材を用いているのだ。

音楽博物館の展示に関しても同様のことがいえる。大きなガラスをはめこんだ展示ケースの金属

製の枠は落ちついた色合いで、決して華やかな装飾をほどこしていない。なかには圧倒されるほどの数の楽器が種類別に並んでいる。管楽器などは楽器の内部に心棒をとおしており、近づいてもほとんど留め具が見えない。展示品が、ふと空間に浮かんでいるように見える。ここも床は板張りであった。

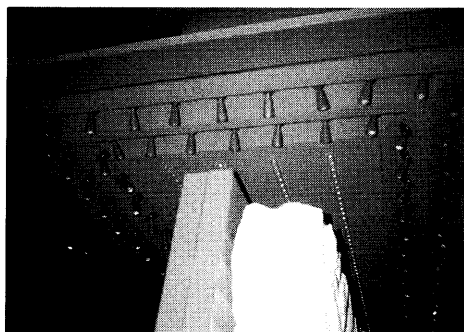


写真9 ルーブル美術館の展示ケースにみる
ピンスポット照明

展示品1点1点を価値あるものにしていくのは、ファイバーを用いたスポット照明であり、急激に数が増えてきた。自然史博物館では、前述のガラス板を背景に、貝ひとつひとつ、ザリガニ1匹1匹にまで照明に気が配られている（写真8）。なお、写真9はルーブル美術館のギリシア・ローマ考古部門の展示ケースのひとつであるが、無数にあるファイバー照明のひとつひとつに微妙に角度をつけてあるのがよく分かる。

作品の解説

一般にフランスの博物館・美術館の常設展にはパネルやキャプションが少ない。といっても説明がないわけではない。ルーブル美術館の主要な展示室には詳しい説明が書かれたプラスチック板の「見学のしおり」がおいてある。また、日本でもよく使われているイヤホンガイドもある。30フラン（約650円）で借りることができ、1000点以上（外国語版では350点）の主要作品および美術館内の名所に関する説明がはいっている。「見学のしおり」、イヤホンガイドともに、フランス語、英語、ドイツ語、スペイン語、イタリア語、日本語の六カ国語で用意されている。入口のインフォメーションで無償配布されるパンフレットには中国語版やオランダ語版もあり、あわせて八カ国語で揃えてある。目の不自由な人々への対策としては、彫刻部門に特別なスペースが設けられており、二十数点の作品をイヤホンガイドを聴きながら触れるようにしてある。

より詳しい解説をおこなう場合、自然史博物館と音楽博物館にみられるようにコンピュータ端末を展示室に設置しているのは、最近よくみられる光景といえる。なお、音楽博物館では後述のヘッドホンを着用したまま操作し、ディスプレイ上の文

字の説明と同時に、耳からも説明そして音楽が聴ける。

1998年9月16日から18日にかけて、ルーブル宮殿内にあるエコール・ド・ルーブルの講堂において「芸術と科学一色」というテーマで国際会議が開催された。そのときのイベントとして、ある夕方すぎ、「美術品の隠れた側面：ルーブル美術館の科学的散策」がおこなわれた(Direction des musées de France 1998)。九点の作品を選び、これまでの科学的調査で判明した事実をもとに詳しい解説をつけたのだ。いくつか例をあげてみよう。エジプトの「座る書記像」のまるで生きているかのような目は、どのようにできているのか。イタリア、ベネチア派の巨匠ペロネーゼの「カナの婚礼」の中央にいる人物の服の色はかつては鈍い朱色であったが、なぜ修復後には緑色になったのか。というふうに、わたしたちが疑問を抱くような事に対する答えが用意されている。といっても、これらの科学的調査は展示解説の一役になうためにおこなわれたのではない。フランス博物館科学研究所(LRMF, Laboratoire de Recherche des Musées de France)²⁾では1931年の開所以来、フランスの国公立博物館・美術館のコレクションの調査研究を続けており、その長年の蓄積がこのような展示解説を可能にしたのだ。従来からおこなわれている美術史的、図像学的、宗教的、文学的な解釈とはひと味違う、作品の「語らせ方」である。このときの対象は、主として会議出席者および関係者であったが、ポイント的にこういう解説の仕方を取り入れるのも一案だ。

4. 臨場感のある展示

どのようにしたら観覧者の注意を最後までそらさないですか。そのひとつの答えが、新しい機器の利用である。たとえば、音楽博物館の聴覚に訴える展示であり、自然史博物館の劇場効果である。ともに共通しているのは新しい手法の導入によって臨場感のある展示にしているところだが、性格は異なる。前者はより説明的でアカデミック、後者は観客を楽しませようという要素が強い。

聴覚に訴える

赤外線を利用してヘッドホンで展示説明をおこなう試みは、パリ郊外、オペール城の「印象派の時代への旅」での応用がフランスにおける常設展示では最初のものだという³⁾。ここでは実物の絵画資料はないが、映像およびヘッドホンからの音響

で当時の様子が再現されている。全体をひとつのプログラムに組立て、ヘッドホンから聴こえてくる説明に沿って、一定時間で観覧が完了するようになっている。効率的に観覧者の入れ替えができるということなのだろう。

ラ・ビレット産業科学博物館の敷地の一角にシテ・ド・ラ・ミュージックができたのが1995年、そしてその中の音楽博物館が開館したのが1997年である(Musée de la musique 1997)。ここでは、解説が全面的にヘッドホンでおこなわれている¹⁾。入口では観覧者一人一人に無償でヘッドホンがわたされる。動線に沿って歩くと自動的に音楽あるいは解説が聴こえてくるしくみであるが、全館を通してひとつのプログラムがあるわけではない。各展示テーマごとにプログラムが組まれており、それぞれが一定のサイクルで繰り返されている。自分がその感受地域にはいったとき、解説が頭の部分から聴けるとは限らないのが少々難点である。音楽が流れている分には途中から聴いても不自然感はあまりないが、言葉による解説の部分だと不便である。とはいっても、その場に滞留していれば繰り返し聴くことができるので、それほど問題にならないのかもしれない。場所によっては、頭の向きをかえると雑音がいり聴きづらいところもあるが、全体的に音響効果はよい。単に楽器が並べてある視覚中心の展示から一步すすんで、聴覚にも有効に働きかける展示である。とくに音楽というテーマにあったものとして評価できる。ただ奇妙なのは、観覧者がそれぞれヘッドホンをつけながら展示品をみていくため、個人個人が孤立してしまうことだ。観覧者同士で感想を述べ合ったり、批評したりという相互関係が生まれてこない。実際に展示場を歩いてみたが、だれも言葉をかわしていなかった。静かな空間の中、観覧者たちは自分にだけ聴こえる音楽に全身を包まれ、歩いている。

劇場効果

自然史博物館(Muséum national d'histoire naturelle 1994)における雰囲気づくりは、かなり個性的だ。内部改装のとき、建築家シュムトフとユイドプロに加えて、舞台設計家ルネ・アリオを採用している。博物館の内部空間をひとつの劇のように仕上げたのだ。展示テーマが、それぞれ○幕目と名付けられているのもそのあらわれといえる。1幕目は大スペクトル「生命」であり、2幕目は「進化」をテーマに、3幕目は「人」をテーマにしている。動線的には、一番下の階から始まる。レベル0「海の生物」のやや薄暗い展示室を通過して、レベル1「地上の生物」へと続く。レベ

ル1は前述の動物の行列のあるところだが、この行列は入口からは直接みえない。レベル1の吹き抜けの広い空間にでたとき、はじめて実物大の動物の行列を目の当たりにする。視覚的にはかなりの衝撃だ。と同時に観覧者は、自らひとつの劇のなかにいることに気づく。この広い空間では、全体照明が1時間40分のサイクルで変化し、夜明けから日没までの一日のさまざまな時間帯をあらわしているのだ。光の強さだけではなく、色も変化させることで、臨場感を高めている。ときには嵐もおきる。と同時に、動物の叫び声、自然のもたらす音、イメージ音楽などの音響効果が照明効果と連動して用いられ、光と音の両方で、今はもの言わぬ動物たちの生活を蘇らせている。

5. さいごに

1999年3月9日付けのフランスの「ル・フィガロ」紙に、最近おこなわれた改装工事に費やした費用の一覧がのった。まだ改装が終わっていないものも含まれるが参考までに記すと、ルーブル美術館60億フラン(115000m²)、ポンピドーセンター4億4千万フラン(70000m²)、ギメ美術館4億フラン(8000m²)、プチ・パレ美術館3億9千万フラン(25000m²)、という具合である。

しかしパリにはこのような大規模なものばかりではなく、もっと地区に根ざした小さな美術館も数多く残っている。たとえば日本人観光客が多いギュスターブ・モロー美術館には、そこに住んでいた画家のイメージが色濃く残っている。美術館にしたいというモローの意志を受け、国が家および作品をひきとってつくったもので、制度的には国立美術館のひとつだ。実際にモローが住んでいたアトリエには「借り物」ではない雰囲気がある。壁面が上から下まで油絵でうめつくされている(写真10)など、内部はひと昔前の様子を残している。調度品は、すべて飴色になった古い木製である。光に弱いパステル画やデッサン類などは、見たい人が扉をめくって見るしくみ(写真11)になっており、必要のないかぎり、むやみに光にあてないくふうがこらされている。



写真10 ギュスターブ・モロー美術館の内部

一方、ロマン生活美術館は、画家アリ・シェフェールのかつてのアトリエのあったところだ。緑の木立が目印だが、入口は気をつけていないと見落としてしまうくらい小さく、表通りに面したアパートマンとアパートマンの間にある（写真12）。入口には「毎日、12時から5時40分までの間、庭でおやつをだします。」という看板がでている。美術館は小さく展示もかぎられているし、おやつに来る子どもたちは別に展示を見に来ているわけでもない。何とも言えない、のどかな雰囲気だ。

莫大なお金を投じて、大規模な改装や新築をおこなう博物館・美術館。そして昔ながらの良さを残す小さな美術館。この両極が共存するところにパリらしさ、フランスらしさを感じる。フランスには確かに文化政策を大事にする伝統がある。博物館・美術館の入館者が減少している傾向があるにせよ、フランスが文化大国というイメージは強い。文化を大切にしているという姿勢、いかえれば自分のイメージをうまく表現することのできる国である。そして、フランスを文化大国とさせているのは、自国の一般の人々の思い入れも大いに関与していることを忘れてはならない。それが、何よりものフランスの強さであろう。

注記

1) 2000年5月現在、フランス文化省がインターネットで公表している最新の統計結果は1998年版（対象は1997年）である。

2) 現在は、修復研究所と合併して、フランス博物館研究・修復センター（CR2MF, Centre de Recherche et Restauration des musées de France）となっている。

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

写真11 展示用の調度品の扉をめくって
デッサンや水彩画を見る人々



写真12 ロマン生活美術館（アリ・シェフェールの家）の入口

3) オーベル城は時間の都合で体験できなかったため、ここに記した事は受付の人の説明をもとにした。

4) 音楽博物館では写真撮影が禁止とされており、展示室内の写真はない。

参考文献

Centre national de documentation pédagogique

1993 Le grand Louvre - Un espace a la mesure du temps, tdc (textes et documents pour la classe), n.664

Direction des musées de France (パンフレット)

1998 Science & Vie : la vie révélée des oeuvres d'art. Parcours scientifique a travers des oeuvres d'art

Musée de la musique

1997 Guide du musée de la musique, Editions de la Réunion des musées nationaux

Muséum national d'histoire naturelle

1994 A la découverte de la Grande Galerie de l'Evolution Editions du muséum national d'histoire naturelle

園田直子

1997 「ルーブル美術館を中心にみるフランスの博物館事情」『民博通信』78、pp.38 - 47